

## 「鉄腕アトム」が牽引した未来社会



(株) サンエコセンター 事業部長 小重 忠司

1952年（昭和27年）から雑誌連載の始まった『鉄腕アトム』は、1963年に国産初のテレビアニメーションとして放映され、手塚治虫の名は日本で一躍有名になりました。手塚は生涯で約15万枚の原稿を描き、約700タイトルの作品を遺しました。その表現手法と物語構成は手塚以後に生み出されたマンガ作品のほとんどすべてに影響を与え、“マンガの神様”と称されるも晩年は胃癌に苦しみ、1989年、60歳でこの世を去ります。

アトムの誕生日は2003年4月7日と設定されていますが、1956年に発行された単行本第1巻でロボットの開発過程が明確に記述されていました。その主なプロットがこちらです。

1974年 超小型電子計算機が発明／1978年 C・ワークツチャア博士が最初の電子頭脳を発明／1982年 猿間根博士が初めて人間の形をしたロボットを開発／1987年 ジェームズ・ダルトン博士がプラスチックから人造皮膚を発明／その後、ロボットは日に日に人間に近づき、話すことも怒ることも笑うことも人間の仕事は何でも手伝うようになり、ロボットにも法律ができる

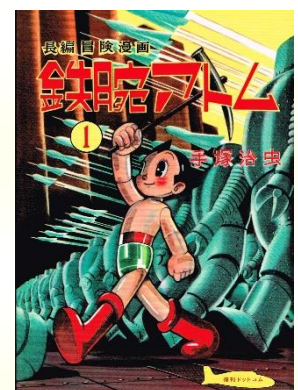
それでは、実際の世界はどうかというと……。

1971年 米インテル社が世界初のマイクロプロセッサ「i4004」を発表／1977年 米アップルコンピュータ社がBASICを搭載した世界初のパーソナルコンピュータ「Apple II」を発表／1980年 産業用ロボットが工場の生産ラインに初めて投入され“ロボット元年”と呼ばれる／1996年 本田技研工業、二足歩行ヒューマノイド（人型）ロボット「P2」を発表／1999年 ソニー、ペット型AIロボット「AIBO（アイボ）」を発表／2000年 本田技研工業が二足歩行ロボット「ASIMO（アシモ）」を発表／2002年 産業技術総合研究所が世界初の起き上がり動作を実現したロボット「HRP-2」を発表

現実にロボット開発路線のポイントを結構押さえているではないでしょうか。2003年にアトムが生まれることはありませんでしたが、日本が“ロボット王国”と呼ばれるほどロボット産業が盛んになったのは、「日本には鉄腕アトムがいたからだ」と言っても過言ではありません。なぜなら、実際にロボットを開発した人々が口々に「アトムを造ることを目指しました」と述べているからです。アトムにあこがれ、アトムが住む未来を夢見た子供たちが大人になって、高速道路や人工衛星、テレビ電話などを実現し、ヒューマノイドロボットの開発も着々と進んでいます。

文学やマンガが果たす役割の一つとして、読者に新たな世界観と想像力を与える力があります。たとえ実際に経験しなくても、文章と絵によって未知な出来事を仮想体験でき、脳に新しいデータを記録することができるのです。そして、脳のなかで過去のデータと融合することで新たな想像力と価値観が生まれ、実社会への応用を可能にしていると考えられます。

手塚治虫は医学部出身で工学者ではありませんでしたが、さまざまな分野において雑談ができるほど博識の持ち主だったそうです。ハードカバーの本をペラペラめくって立ち読みで読了するほどの速読力もあったとのこと……。自身の専門分野だけではなく幅広い知識でイマジネーションを膨らませる能力は、これから人口が減り続ける日本の社会において、未来をデザインする大切な要素となるのではないのでしょうか。



1956年に光文社から発行された『鉄腕アトム第1巻』の復刻版（2014、復刊ドットコム）